

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ お成り街道散策と法然寺探訪

講 師 池田利夫

(高松市歴史民俗協会常任理事)

平成20年10月26日(日)

共 催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 仏生山町

仏生山町は明治三十一年（1898年）に町制をしいて法然寺（仏生山来迎院法然寺）の山号をとり、町名としました。百相（もまい）村が改称され、旧大字（おおあざ）を継承して百相・出作の二大字を編成しました。その際、多肥出作村の一部を仏生山町の出作に編入し、役場は出作に置かれました。

大正十五年（1926年）に現在の高松琴平電鉄の栗林公園～滝宮間が開通し同時に仏生山駅が設置されました。昭和二年（1927年）高松～琴平間の全線が開通し、同四年（1929年）に塩江村に至る塩江温泉鉄道が開通。交通の要衝として発達しました。また、法然寺の門前町として道沿いには商家が多く立ち並んでいました。昭和三十一年（1956年）市町村の配置分合に伴い高松市と合併し、町制時の二大字は仏生山町となりました。左記は江戸時代に編述された「日本名所風俗図会」の一文です。

【仏生山】 高松より二里。村名は百相なれども法然寺の山号を呼びてしかいひ来れり。

国君御廟所ありて、高松の藩士ここに詣で拝礼をなせり。安原村塩江なる霊泉への往来にて人家のきを並べて繁富の地なり。町入り口に紀州加田浦及び阿州より金毘羅へ参詣の道あり。よつて旅客多く法然寺に詣でてここに宿りぬ。ゆゑに旅舎多し。かつ素麺はこの地の名産にて、年毎に幕府へ奉りぬ。

2 ガソリン道

塩江温泉鉄道は昭和三年（1928年）に設立され、昭和四年（1929年）に開通しました。全国でも珍しいガソリンカー（マッチ箱と呼ばれていた）が仏生山を始発として十六キロあまりを四十分で走り、塩江温泉へ客を運んでいました。車掌も運転士も十代の少年が多く、運転技術は未熟な上、車両もよくゆれたので事故も多かったようです。当時塩江温泉では、菊人形や少女歌劇が華やかに催され、少女ジャズバンドも売り物の一つでした。

戦争の影響でガソリン不足や軌道を資材として徴発されたため、開業後わずか十二年で昭和十六年（1941年）に廃止されました。鉄道の通っていた道はガソリン道と呼ばれコトデン仏生山駅から浅野く川東く岩崎く鮎滝く岩部を経て塩江まで続いており、現在もトンネルや駅のホームの一部など、往時を偲ばせる構造物が所々に残っています。



ガソリン道

3 百相城跡・別所屋敷跡

百相城は河西氏の居館跡であり、その後香川郡東部八か村を取り仕切っていた大庄屋の別所氏が屋敷を構えていました。庄屋として三代目の九兵衛包好（かねよし）は天明二年（1782年）の大暴風雨、天明四年（1784年）から天明八年（1788年）にかけての不作、関東地方では浅間山の大噴火が起こるなど、後に天明の大飢饉と言われる飢饉の際、自家の貯蓄米を郡内に分配し、自分が預かる郡内からは一人の餓死者も出さなかったと伝えられています。

松平家九代藩主頼恕（よりひろ）は九兵衛の徳をたたえ碑を建てさせました。それが現在別所屋敷跡に残っている「別所九兵衛功德碑」です。

当時の別所屋敷は周囲に堀をめぐらし、一町四方の広さであったと伝えられています。明治二十年（1887年）も押し迫った大晦日の夜半、広大な屋敷の勝手口から出た火は二年越し三日間燃え続け屋敷は燃え落ちました。正月の餅つきの火の不始末が原因とも言われています。



別所九兵衛功德碑



百相城跡碑

4 お成り街道

江戸時代、高松城下常盤橋（三越付近）を起点として志度街道・長尾街道・金毘羅街道・丸亀街道・仏生山街道の五街道が讃岐の各地に通じていました。この五街道の1つ仏生山街道は、藩主が菩提寺の法然寺に参詣するた
めに通ったことから、お成り街道とも呼ばれています。

町並み

仏生山街道（香川県道166号岩崎高松線）のちきり神社に至るまでの約一・三キロメートルは本町通りと言われ、この通り沿いの民家や商店の中には、江戸時代から明治時代頃に建てられた古い家屋が点在しており、往時の賑わいを彷彿とさせます。またこの地区は高松市から仏生山歴史街道都市景観形成地区として指定されています。

この地区に残る古い民家は町屋造りという独特の造



お成り街道（正面は、ちきり神社）

りで、法然寺へ参詣する殿様の行列を見下ろさないようにと、低く造られた中二階や虫籠窓・連子窓・袖うだつ・懸魚（げぎょ）・なまこ壁など重厚な中にも民芸的な美しさを見せています。



虫籠窓・袖うだつなどが
見られる民家

芝居小屋

本町通りには二箇所芝居小屋があり、城下では許されない芝居興行を許可していました。芝居小屋の規模は大きく、人々の娯楽だけでなく、幕府から派遣される巡見使の接待にも使われました。江戸時代も終わりにになると立派な常小屋が建ち、人形浄瑠璃・歌舞伎・軽業などの興行が行われました。その頃は法然寺の門前町としてだけでなく、金毘羅参り

の宿場町としても賑いました。明治二十二年（1889年）讃岐鉄道が開通してからは宿屋も芝居小屋も振るわなくなり、やがて姿を消してしまいます。

明治四十年頃、この通りに再び芝居小屋が建ち、上町には明治閣（後に大黒座）・下町には桜座（後に香川座）と2座が盛大に芝居熱を盛り上げました。上方（かみがた）から千両役者の来演ともなるとチンドン屋（東西屋）を先頭に劇場の名前を大きく染めたのぼりを担いで町中を練り歩いたそうです。

そうめん

仏生山町はかつて有名なそうめんの産地でした。高松藩初代藩主松平頼重は菩提寺法然寺の門前町を造るに当たり幅六間（約十一メートル）の道（往還）を南北に通し、奥行三十間（約五十五メートル）という広い敷地を用意しました。必要なだけの土地を無料で貸し与えることにしましたが、商売が成り立つ見込みは無く、移り住む人も少ないため門前町はなかなか出来ませんでした。頼重は藩内の製麺業者に対し、仏生山に移住した人だけに素麺製造を許しました。広い通りを利用して素麺を干す作業が行われ、もともと住んでいた人たちも業者からその製法を学びました。藩は町内に素麺会所を作り、買い上げの事



務や品質の管理を役人に当たらせました。製造された素麺の品質の良さは他藩にも認められ、全国にその名を知られるようになりました。

銘柄としては「月の友」「松の雪」「島の誉」「ちきりの誉」などがあり、一貫目（3・75kg）当たり六十五銭〜一円の値段がついていました。昭和の末頃まで続いた素麺作りは時代の移り変わりとともに次第に姿を消していき、現在素麺作りは竜雲学園に引き継がれ「龍雲」として生産販売されています。

5 ちきり神社

古くには浅野村唐土（唐戸）に鎮座していました。萬壽年間（1024〜1027年頃）仏生山と浅野村の境にある平池の松原に遷座しましたが、その後洪水のため西方の丘に遷座し、さらに現在の法然寺の山に遷座しました。

ところが、藩主松平頼重公がこの山に法然寺を造営するにあたり、寛文九年（1669年）現在の地に松平家



ちきり神社

の鎮護社として遷座しました。国に事がある時は藩主自ら参拝祈祷し、神符を国中に配布したそうです。明治四十年（1907年）十月二十四日に神饌幣帛供進神社（神社本庁から例祭に金銭が送られる神社）に指定されました。

祭神は稚日女命（わかるめのみこと・わかひるめのみこと）日本神話に登場する女性の神様です。若くみずみずしい日の女神という意味を持っています。また天照大神の妹とも言われています。

「高天原の斎服殿で神衣を織っていた時、スサノオ命が馬の皮を逆剥ぎにして部屋の中に投げ込んだ。稚日女命は驚いて機から落ち、持っていた梭ひで身体を傷つけてなくなってしまった。それを知った天照大神は天岩戸に隠れてしまった。」と古事記に記されている神様です。

また「日本名所風俗図会」には次のような記載もあります。

ちきり大明神

当社は治承二年この地に行けを堀ける時、堤しばしばぶれてならず。人柱を用ゆべしと云う。たまたま婦人ちきりを持ちて通るものあり、捕らへて土中に埋めしかばその後、里中にたたりをなす。ゆゑに敬畏して社を池の西南に建てて祀る。九月十三日の事なり。池を平家池と云ふ。あるいは内大臣平宗盛公建立すとも云へり。しかるに満水の時、社地

まで水溜まるゆゑ、岡の上といふ処に遷宮あり。また東方山上に移す。

寛文九年、国祖君法然寺御造宮の時、社司田村掃部へ御装束等をたまへり。

人柱伝説の乙女は平池のほとりに、いわざらこざら（いわなかったらよかった こなかったらよかった）の碑として静かに湖面を見つめ、佇んでいます。



いわざらこざらの少女像

6 法然寺（仏生山来迎院法然寺）

高松藩主松平頼重の命により建立された法然寺は、長宗我部の兵火に遭い灰燼となった法然上人開基の正福寺（那珂郡小松庄）をこの地に移し、改号したものです。寛文八年（1668年）三十三の門と二十四の堂宇を起工し、三年後に落慶、寺領三百石を寄せ法然上人を開祖とする松平家の菩提寺としました。水戸光圀の兄に当たる松平頼重は浄土宗・天台宗の保護が厚く当寺再興もその一例とされています。

創建当事六万五千余坪を有した境内は寺後背の山を須弥山に模し、地獄から極楽へ至る過程を伽藍の配置で示しています。来迎堂後の丘陵地から山頂の般若台にかけて法然上人と歴代藩主、その一族や家臣たちの墓六百基が整然と並ぶ一角となっています。

二河白道（にがびやくどう）

総門を入ると黒門までの間、万燈籠が並ぶ道が続きます。右に水の河、左に火の河、その間にある細い道を抜けると極楽浄土にたどり着ける、という唐の善導大師が唱えた喩え「二河白道」を現しています。

＊ 浄土往生を願う者が道を進むと火・水の

二河に出会います。猛火の河、荒れ狂う水の河、ともに深くて底なしです。この二河の間に1本の細い白道があつて、道には火と水が押し寄せてきます。また、うしろから悪獣や殺人鬼が迫ってきます。道は狭く引き返す事も出来ません。すると東岸から「この道を進みなさい。必ず難をのがれるでしょう」見上げれば阿弥陀様、また西岸に「心を定め進みなさい。必ずあなた護りましょう。」と呼ぶ声、振り返ればお釈迦様、そこで疑わず迷わず白道を進むと彼岸に達することが出来ました。

十王堂

閻魔大王以下冥界を統べる十人の王と奪衣婆が並んでいます。二河白道を渡る前に冥界の審判を受ける、というものです。



万灯籠

＊十王は死者の罪の多寡を鑑み、地獄へ送ったり、六道への輪廻を司るなど畏怖の対象でした。

秦広王（しんこうおう）・初江王（しょこうおう）・宋帝王（そうていおう）・五官王（ごかんおう）・閻魔王（えんまおう）・變成王（へんじようおう）・泰山王（たいざんおう）・平等王（びようどうおう）・都市王（としおう）・五道転輪王（ごどうてんりんおう）の十王。

＊^{だっえ}奪衣婆は、三途川の渡し賃である六文銭を持たずにやってきた亡者の衣服を剥ぎ取る老婆。奪衣婆が剥ぎ取った衣類は、^{けんえ}懸衣翁という老爺によつて衣領樹にかけられ、衣領樹に掛けた亡者の衣の重さにはその者の生前の業が現れ、その重さによつて死後の処遇を決めるとされています。

黒門

二河白道を通つて黒門に行き当たります。扉を閉めても四六時中患者が出入りできるように、門の脇に木戸をつけた薬医門の形をしています。珍しい黒塗りであることから、黒門と呼ばれています。



黒 門

仁王門

黒門と仁王門の間が広場になっています。この広い空間は藩主家の葬儀・法要・参詣した涅槃会など大勢の参詣者に対応できるよう考慮されて作られたものです。仁王門には阿形・吽形の迫力ある仁王が守護しています。この像は法然寺建立当時延宝二年（1674年）の造立です。寛政八年（1796年）に修理、弘化年中（1844年〜47年）に門が焼失し、像も1部が焼けましたが、嘉永三年に復興された事が確認されています。この門をくぐると極楽浄土への1本の道が始まります。



仁王 阿形像



仁王 吽形像

二尊堂

二尊堂は門形式の堂宇で上部に釈迦如来と阿弥陀如来がまつられています。高い天井には極彩色の飛天と鳳凰が舞い、二尊の後壁には蓮池が描かれています。規模は南北に十二間、東西に五間で高床、両翼に広い空間が取られています。

鐘楼門

二尊堂の上に鐘楼門があります。門形式になっており、仏法の守護神梵天と帝釈天が守護しています。楼上には梵鐘があり朝夕にその音色を響かせています。鐘は戦時中に供出されましたが第二十七代細井照道住職によって昭和二十四年（1949年）に再鑄されました。梵鐘研究家の青木一郎博士の設計・鑄造・福田平八郎画伯による鳩図・歌人吉井勇の歌と書が平和を願って意匠されています。

来迎堂

石段を登りきると来迎堂に至ります。阿弥陀如来を中心に二十五菩薩が安置されています。すべてが立像で、阿弥陀如来が紫雲に乗り、観音菩薩・勢至菩薩を脇侍に従え、手にそれぞれの樂器を携えた諸菩薩や天人を引き連れてやってくる様を現しています。室町時



梵天と帝釈天



二尊堂

代は下らない古作とされています。また常念仏堂とも呼ばれ、歴代藩主と内室の位牌を置く室ともなっています。

般若台

雄山の頂上に当たる位置に般若台があります。讃岐平野の東部一帯（高松藩領）が見渡せる場所です。

ここに法然上人と歴代藩主・その一族、般若台の下には多くの家臣が葬られています。

三仏堂（涅槃堂）

三仏堂の本尊は中央に横たわる寝釈迦と阿弥陀・釈迦・弥勒の三仏です。

釈迦の入滅に嘆き悲しむ様子を立体的に表した立体の涅槃像が広がっています。文殊・普賢・観音の三菩薩、十大弟子の羅漢・明王・神将たち眷属、象や鶏に至る鳥獣類そして釈迦の入滅を知り、雲に乗り降下してくる釈迦の母摩耶夫人。ほぼ実物大の大きさを再現され、数の上でも類例のない彫刻涅槃像で「讃岐の寝釈迦」として広く知られています。



三仏堂（涅槃堂）

【参考文献】

『日本地名大辞典』

『日本名所風俗図会 14 四国の巻』

『香川県神社志 上巻』

『創立百周年記念誌ふるさと仏生山』

『仏生山法然寺』

『仏生山法然寺の名宝展』

（株）角川書店 昭和六十年十月八日発行

（株）角川書店 昭和五十六年十二月三十日発行

香川県神職会 昭和十三年十二月一日発行

創立百周年記念事業実行委員会

平成四年十月十八日発行

仏生山法然寺 平成十六年四月一日発行

高松市歴史資料館

平成四年十一月三日～十一月二十三日開催図録

